

17 【すげえ】

そういうことで、【すげえ】をみにいきました。

小屋にいったらみると、【すげえ】は留守（るす）で、おそらく二十歳前の、娘が三人いました。

「いったい、どうしたんじゃ、どうして、ここにいるんじゃ」

ぼくはききました。

「私たちは、隣村の女たちです。村はずれの峠でさらわれて、ここに連れてこられたんでえす」

「神隠しかい。ひとさらいは、【すげえ】じゃろ」

完ちゃんがききました。

「よくごぞんじですね。【すげえ】はとにかく、すげえ人だから、いえ、すげえお婆けだから、逃げることもできませんわ」

「けんど、たかがお婆けじゃろ。鬼でも、天狗（てんぐ）でも、なかりうに」

「そうじゃ。【すげえ】のいぬまに、にげろや」

完ちゃんとぼくが、そそのかすと、

「【すげえ】は、すげえから、【すげえ】というのです。留守でも、私たちは逃げられませんわあ」

「【すげえ】のどこが、すげえんじゃ」

ぼくはききました。

いくら【すげえ】でも、懐爺にはかなわないだろうと、ひそかにおもいつつ。

「どこがって」

と娘たちは顔を見合わせます。

「どこがって、ねえ。すげえものは、すげえのですよん」

「すげえ、すげえ、だけじゃ、わからん」

声をあげると、娘たちはまた顔を見合わせる。

こんどは、なぜだか、笑っているふうにみえます。

「まあ、こどもにはわからないでしょうけんど、あのね、魅力（みりょく）が、すげえのよん」

娘たちは、また顔を見合わせて、頬を赤らめます。

「ばかばかしい」

と完ちゃん。

「かえるがなくから、かえろ」

とぼく。

帰るとちゅう、完ちゃんが、こうつぶやきました。

「魅力ってさ、漢字にするとさ、未来の鬼の力って、書くんじゃ。あいつらはさ、鬼くらい、力のある、未来の男を、産みたいんじゃ。【すげえ】の子をよ」